

奇跡

江苏工业学院图书馆
藏书章

真保裕一

Yuichi Shimpō

角川書店

奇跡の人

平成九年五月二十五日初版発行
平成九年六月二十五日三版発行

著者——真保裕一

発行者——角川歴彦

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二一三三

〒102 振替〇〇一三〇九一九五二〇八

電話／営業部〇三三三三八八五二一

編集部〇三三三三八八四六一

印刷所——旭印刷株式会社

製本所——株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

© Yūichi SHIMPO 1997 Printed in Japan

ISBN4-04-873049-5 C0093

※真保裕一（しんぼ ゆういち）

1961年東京生まれ。アニメーションディレクターを経て、'91年『連鎖』で第37回江戸川乱歩賞を受賞する。綿密な取材、堅度の高い文章から生み出される作品群は、幅広い読者の支持を獲得し、'96年『ホワイトアウト』で第17回吉川英治文学新人賞を、そして本年度『奪取』で第10回山本周五郎賞と第50回日本推理作家協会賞を受賞する。

本書は従来にない題材で、圧倒的な人間愛を描いた感動の物語である。

奇跡の人

装丁／角川書店装丁室

目次

母のエピローグ	400
ノート 6	356
ノート 5	283
ノート 4	205
ノート 3	131
ノート 2	60
ノート 1	11
母のプロローグ	5

母のプロローグ

愛する克己へ。

あなたがこの手紙を読む時には、たぶんお母さんはもうあなたをそばからいなくなっていると思います。どうかこの手紙を読んで、新たに悲しがつたり寂しがつたり、気を落としたりしないでください。親が子より先に世を去るのは、さけられない自然なことなのです。あなたも病院で多くの人の死に接し、身をもってそれを学んだはずです。悲しく辛いことではありますが、誰もがそれに耐えていかなければなりません。お母さんも、おじいちゃんやおばあちゃんを見送りました。お父さんも同じように両親の死を看取りました。そして、あなたは覚えていないかもしれませんが、二人でお父さんをも見送りました。

ですが、克己。

今度はあなた一人です。

一人でそれに耐え、乗り越え、そして、誰かが同じように悲しい思いをしている時には、自分から手を貸してあげられるような人になってください。たぶん、あなたなら、それができます。

二度目の手術を明日にひかえて、今これを書いていきます。手術が終わったあとは、治療に専念するよう、院長先生からも言われています。もしかすると、これがあなたへの最後の言葉になるかもしれません。

もちろん、病気に根負けして、あきらめてしまったわけではありません。最後までできる限りの努

力をし、少しでもあなたのそばにいられるよう、お母さんはがんばるつもりでいます。そのための手術なのです。けれど、もしものことを考え、これを書いておこう、と決めました。

病院で多くの患者さんを見てきたあなたなら、もう察しているとは思いますが、はじめに、お母さんの病氣について書いておきます。

院長先生から告知を受けたのは、十月の五日でした。告知というのはわかりますね。病氣について先生からくわしく教えてもらうことです。春先からお母さんの腰が時々痛むようになっていたのは、あなたも知つての通りですが、ようやく正式な検査の結果が出たのでした。

克己。あなたは、自分のせいだと言つていつもすまなそうな顔をしていましたが、お母さんが何度も言つたように、あれはあなたのせいではありませんでした。今でこそあなたもつえさえあれば一人で歩けるようになりましたが、六年前にはその場で立つこともできなかったのです。そんなあなたを、誰の手も借りずに毎日ベッドから起こしては車いすに移しかえ、いっしょに散歩をしていたのですから、お母さんの体はけっこうたくましくできています。それに、あなたの笑顔を見れば、どんな疲れもすぐにふき飛んでしまします。だから、何度も言つたように、あれはあなたのせいではありません。病氣のせいだったのです。

院長先生から聞かされた病名は、想像していた通りでした。

二年前、206号室にいた孝義君と同じ病氣だと聞けば、あなたにもわかるでしょう。孝義君の頭の中にできたのと同じ種類のできものが、お母さんの場合はすい臓にできてしまったのです。

体の調子があまりにもよくないので、あるていどの予想はしていました。けれど、あれほど急いで手術をしなければならぬとは思っていませんでした。あなたと会うために毎日通つていた病院に、自分までがお世話になり、いつのまにかあなたに見舞われるような立場になってしまふとは。

あなたの健康にはいつも気をつけていたつもりなのに、自分のことを忘れてしまふなんて、笑い話にもなりませんね。お母さんの不注意でした。「医者の不養生」ということわざがありますが（意味が

わからない場合はいつものように辞書で引くように、これではまるで「看護人の不養生」です。

克己。あなたもどうか体調の変化には充分気をつけてください。自分で招いたこととはいえ、どうしてももう少し早く先生に診てもらわなかったのかと、お母さんはそのことをひどく悔やみました。今もなお、悔やみ続けています。あなたの場合は後遺症の心配もあるのですから、体の不調に少しでも気づいた時は、すぐに診てもらうようにしてください。このぐらいいは大丈夫だろうという油断から、病気は重くなるものなのです。お母さんの不注意をいましめとして、どうかあなたは自分の体に細心の注意を心がけてください。

入院中、毎日お母さんの病室まで足を運んでくれて、本当にありがとう。言葉では表せないぐらいうれしく、また、どんなに力づけられたかわかりません。エレベーターを使わずに、毎日午前と午後の二回も階段を上り下りするのは、かなりきつかったことでしょね。でも、そのがんばりがあったからこそ、今のあなたがいるのです。結果的に、あなたの辛いリハビリの手助けをできたのですから、お母さんの入院も少しは役に立ったのかもしれない。そう考えると、ちよつぱりすくわれたような気持ちになります。

院長先生のお話では、一度目の手術で悪いところは取れたはずでした。けれど、どうやらまた悪いできものが、今度はすい臓の近くにできてしまったようです。担当の山田先生は、あなたも知っているようにとても優しい人なので、まだお母さんには何も言えずにいますが、治療の方法と薬の種類から見ても、まず間違いないでしょう。お母さんはずいぶん長いこと病院に通っていて、何人もの患者さんの容体や治療の方法を見たり聞いたりしているので、看護婦さんにも負けないほど、病気のことがわかってるつもりです。

だからといって、もちろんお母さんは病気を甘んじて受け入れたわけではありません。山田先生や看護婦さんの力を借りて、できる限りがんばり通し、少しでもあなたのそばにいられるよう、これからも努力するつもりでいます。一度は脳死の判定をされかかりながらも、奇跡的に命をとりとめ、の

みならず、植物状態はまずさけられないだろうという予測をはね返し、一人で歩けるようになったあなたの姿を、誰よりも近くで見ているのですから。病院中の人たちから「奇跡の人」と呼ばれる息子を持つ母親として、恥ずかしいことだけはしたくないと考えています。

克己。何度でもお母さんは言います。

あなたは私のほこりです。

あなたというかけがえのない子を得られて、お母さんは幸せでした。

八年という年月は確かに長いものでしたが、お母さんにはこれほど充実した時はありませんでした。あなたにとつては、辛く、もどかしく、きびしい入院生活だったと思います。けれど、その経験は決してむだにならないと思います。やがてはあなたも病院を出て、街で普通に暮らす日が訪れるでしょう。その時には、病院での生活で得てきたものが、必ずやあなたの心の支えになると思うからです。

おそらくは、病院を出ても、また入院中とは違った辛い現実が待っていることだと思います。社会に出れば、病院の中のように誰もがあなたに手を貸してくれるわけではありません。不自由な体のろいたくなる思いにおそわれることもあるでしょう。後遺症に悩まされ続けるかもしれません。ですが、社会に出れば、人は自分自身の足で立ち、歩いて行かなければならないのです。歩けない者は、つえや車いすの力を借りても、何としても自分の力で前へ進んで行く覚悟が必要です。その手助けをしてやれそうにないことが、お母さんのたったひとつの心残りです。

ですが、克己。

あなたならできます。

あなたは死の淵から自分の力でここまではい上がってきた「奇跡の人」なのです。どんな辛いことにおつかったとしても、あなたなら必ずそれを乗り越えていけるはずです。この八年の日々は、あなたをたくましくきたえ、成長させました。これまでの長い入院生活は、あなたに、どんな辛いことがあっても決してくじけない、それでいて人への思いやりを忘れない、強くしなやかな心を作りました。

それは、お母さんのほこりでもあり、あなたの大きな財産でもあります。どうか自信を持って歩いていってください。あなたなら、きつと一人でも歩いていけるはずです。そうお母さんは信じています。サイドボードの一番上の引き出しの中に、十六冊のノートが入っています。あなたが奇跡的に命をとりとめてからのことを、毎日少しずつ書きとめたものです。それを読めば、あなたがどうやって死の淵からはい上がってきたのかがわかるでしょう。つらいことにおつかった時には、読んでみるといいかもしれません。お母さんも、あなたの容体が思わしくない時には、以前の悪かった時期とくらべ、何をすればいいのかを振り返って考え、目に見えて元気を取り戻した日のおどるような文字を見返しては、昔の自分に何度かはげまされたものでした。

十六冊のノートは、あなたの成長記録です。ですが、それは同時にお母さんの成長記録でもあります。あなたというすばらしい子を神様からさずかり、お母さんもいつしよに成長することができたのです。それはもちろん、院長先生や定村先生、それに多くの看護婦さんたちの手助けがあつてのことでした。それを忘れるわけにはいきません。あなたに尽くしてくれた多くの人たちに見守られて、お母さんは今日まで生きてこられたのだと思っています。そして、もう少しだけ手を借りて、できるかぎりあなたのそばに長くいたいと考えています。

万一を考えて、あなたのことは院長先生によく頼んでおくつもりです。院長先生の言葉は、お母さんの言葉だとこれからは思ってください。

克己。

何度でもここに書きとめておこうと思います。

あなたは母のほこりです。あなたと出会えて、本当に、本当にお母さんは幸せでした。あなたとのよき思い出の数々を、先に行ってしまったお父さんに、天国でたつぷりと話すつもりでいます。たぶんお父さんは、お母さんのことをともうらやましく思い、悔しがるでしょう。

克己、どうか強く生きてください。

あなたは「奇跡の人」なのです。何もおそれることはありません。

最後になりましたが、院長先生と定村先生、そして山田先生と看護婦さんたちに、あなたからもうかお礼を言っておいてください。先生方には、どれだけ感謝の言葉を重ねても足りないほどですから。

克己。本当にありがとう。

お母さんは幸せでした。

克己、あなたを一人にしてごめんなさい。けれど、あなたなら一人でも歩いていけるはずです。お母さんは、そう心から信じています。

あなたの人生は、これから始まるのです。くじけずに、どうかがんばってください。

十二月十一日

母より

三月二十一日

今日から克己のために、このノートをつけていこうと決めた。一見、ただ寝ているように見える克己だが、体の中ではきつと怪我と戦っているのだと思う。いや、必ずそうだ。何よりもまず、なえそうになつてしまう自分を戒め、勇気づけるためにも、このノートをつける意味がある。私が疲れ果て、あきらめた時に克己は死ぬのだ。絶対にあきらめはしない。あの子は必ず命をとりとめる。意識が戻る。そして私を抱きしめてくれる。唯一の肉親である私がそう信じ、あの子の体にふれ、声をかけ続けてやるのだ。そうしてあげることが一番いい、と先生も言っていた。

必ずあの子は蘇る。

あきらめてはいけない。

この言葉をここに書きつけ、同時に胸に刻みつけておこう。

三月二十二日

脳圧がまた高くなった。薬の効き目がだんだん薄くなつてきているのが、素人の目にもわかる。依然、脳波も低いまま。脳圧の亢進とともにさらに血流が鈍くなりかけているのだろうか。午後、寺田先生から、今後の治療について説明を受ける。このまま脳浮腫の状態が進めば、間違いなく脳死にいたる、と言われる。だが、望みは捨てないようにしよう、とも。その

言葉だけが、今は頼りだった。

今後は少しでも脳の温度を下げるための努力を続けてみるとのこと。低温状態にすることで、できるだけ脳細胞の損傷をくいとめるのが目的だそう。たとえ命をとりとめたにしても、脳細胞が破壊されてしまえば、克己は植物状態になってしまう恐れがある。

先生方は、克己が意識を取り戻した時のことまでを考えてくれている。だからこそ、低温処置だそう。ただ、そのため、今までのようにICUへの出入りはできなくなる。克己に話しかけてやれなくなるが、それも今は仕方ない。

夕刻、一時的に脳圧が三十を切るが、再び上昇。

三月二十三日

脳圧の高い状態が続いている。

いくらかまた顔にうつ血とむくみが増したように見える。アルコールで体の熱を下げる処理。忙しく働きつつも、私を気かけ、声をかけてくれる看護婦さんたちに、ただ感謝する。事故の当初は、克己の状態に驚き、彼女たちに当たり散らしてしまった自分が恥ずかしく思える。

午後、脳の断層撮影の写真を見せていただく。

事故直後に比べると、また一段と明るい部分が少なくなった。脳が腫れ、次第にしわが埋められていくのだそう。黒い影の広がりを見ると、こちらの胸までが暗くふさがれそうになる。先生は病状を逐一説明してくれるものの、耳をふさぎたくなってしまうようなことが多い。先生が私までを心配してくださる。私が倒れてはいけない。

食事、進まず。思い出すのは、家族三人の楽しい時のことばかり。先にいつてしまったあの人を恨む。

三月二十四日

夕刻、寺田先生が再び脳幹反射の確認。瞳孔は拡大したままで、反応はなし。対光反射、角膜反射も依然失われたまま。唯一、脳波だけが弱いながらもかすかな波形を刻んでいる。それだけが救い。

先生から、脳死の一手手前、と言われる。

最悪の場合も考えておいたほうがいい？ 克己が意識を取り戻すこと以外に、母親が何を考えればいいのか。

三月二十五日

容体変わらず。祈るのみ。

三月二十六日

現状変わらず。看護婦さんが、克己の体をふいてくれる。その時に見えた足が、どきりとするほど細くなっていた。短期間でこれほど人の足が細くなるものだろうか。点滴だけの栄養では足りないのか。それとも、栄養を体に補給する力すらなくなっているのか。

三月二十七日

断層写真。見るのが辛い。脳幹の隙間がほとんど見えなくなる。脳圧限界。頑張り、克己。

三月二十八日

事故から二週間が経過。ここまで持ったことが、すでに奇跡に近い、と先生から言われる。

なぐさめはいらない。治療の続行をひたすらお願いする。

三月二十九日

麥わらず――

三月三十日

たとえ命をとりとめたにしても、このままでは植物状態の可能性が高い、と言われる。必死に打ち消していた不安を、目の前に突きつけられた思い。先生の顔も、遺族を遠目にするような遠慮がちのものに見えた。

このままあの子が何も話さず、動きもせず、ベッドの上でただ老いていくだけになるのだろうか。先生に尋ねると、意識を取り戻す確率は非常に低いと言わざるを得ない、とのこと。けれど、たとえどれほど低くとも、可能性がゼロになったわけではない。非常にまれなケースだが、何年もしてから意識を取り戻した症例もあるという。○・一パーセントでも可能性が残っていれば、それに望みを託すのみ。私は克己を信じる。信じたい。

二十一時四十分。二日前の深夜に運ばれて来た患者さんが亡くなった。克己より脳波がはっきりしていたというのに。あまりにも急すぎる容体の悪化にただ驚く。奥さんに声をかけるが、何も言えない状態だった。弟さんが駆けつけ、初めて彼女は泣き崩れた。私には肩を寄せて泣く人はいない。強くならなければいけない。

それにしても、克己は本当に強い子だとあらためて思う。生死の境をさまよい、もう三週間近くになる。先生や看護婦さんらも、あの子の体力には本当に驚いている。

あの子なら……。もしかするとあの子なら……。そう祈らずにはいられない。